

2020. 9. 20 第三主日あかし礼拝

I 列王記 17:8-24 「主は生きておられる」

聖書

- 8 すると、彼に次のような主のことばがあった。
- 9 「さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしはその一人のやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」
- 10 彼はツアレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、薪を拾い集めている一人のやもめがいた。そこで、エリヤは彼女に声をかけて言った。「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」
- 11 彼女が取りに行こうとすると、エリヤは彼女を呼んで言った。「一口のパンも持って来てください。」
- 12 彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私には焼いたパンはありません。ただ、かめの中に一握りの粉と、壺の中にほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本の薪を集め、帰って行って、私と息子のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです。」
- 13 エリヤは彼女に言った。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。その後で、あなたとあなたの子どものために作りなさい。
- 14 イスラエルの神、主が、こう言われるからです。『主が地の上に雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくなるしない。』」
- 15 彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。
- 16 エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、壺の油はなくならなかった。
- 17 これらのことの後、この家の女主人の息子が病気になった。その子の病気は非常に重くなり、ついに息を引き取った。

- 18 彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはいったい私に何をしようとされるのですか。あなたは私の咎を思い起こさせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。」
- 19 彼は「あなたの息子を渡しなさい」と彼女に言って、その子を彼女の懐から受け取り、彼が泊まっていた屋上の部屋に抱えて上がり、その子を自分の寝床の上に寝かせた。
- 20 彼は主に叫んで祈った。「私の神、主よ。私が世話になっている、このやもめにさえもわざわざを下して、彼女の息子を死なせるのですか。」
- 21 そして、彼は三度その子の上に身を伏せて、主に叫んで祈った。「私の神、主よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに戻してください。」
- 22 主はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちがその子のうちに戻り、その子は生き返った。
- 23 エリヤはその子を抱いて、屋上の部屋から家の中に下りて、その子の母親に渡した。エリヤは言った。「ご覧なさい。あなたの息子は生きています。」
- 24 その女はエリヤに言った。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。」

はじめに

今日は、神さまは生きておられるということを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。まず、一つのデータに注目してみましょう。2008年に神さまの存在について世界40カ国で調査した結果があります。少し古いデータですが、今とさほど変わらないと思います。日本人の神意識は次のようでした。「神の存在を信じない」8.7%（20位）、「神が存在するかどうかはわからないし、それを明らかにする方法もないと思う」19.3%（1位）、「神がいるとは思わないが、何か超自然的な力はあると思う」23.3%（8位）、「神の存在を信じる時もあるし、信じない時もある」32.2%（1位）、「神の存在に疑問を感じることもあるが、神は存在すると信じている」12.0%（33位）、「私は、実際に神が存在することを知っており、神の存在に何の疑いも持っていない」4.4%（40位）。

纏めると、「神はいないと思う人」51.3%、「いると思う時もある人」32.2%、「神はいると思う」16.4%。さて、皆さんはどのグループに近いでしょうか。

1. 神は死んだ？

19世紀のドイツに「神は死んだ」と言って、強くキリスト教を批判した哲学者がいます。フリードリヒ・ニーチェです。ニーチェは牧師の息子で、彼が5歳のときに父は転倒事故がきっかけで亡くなり、2歳だった弟も病で亡くなります。男手を失った家族でしたが、伯父伯母の助けによって生活は守られました。子供のころは信仰を持っていましたが、成長するにつれて信仰から離れ、次第に神さまの存在を否定するようになって行きます。神さまの存在が前提となっていた当時のヨーロッパに真っ向から反対したのです。その結果、「人はなぜ生きるのか」「人はどこに向かって生きるのか」「人は誰のために生きるのか」という人が自分の存在目的を問うこと自体意味がないという虚無主義に至ります。この思想は、結構の私たちの中にも入り込んでいるのではないのでしょうか。キリスト教に激しく反発したニーチェですが、実は「神は死んだ」ということばの背後には、人間が神さまを殺したのだという思いが隠れていると言われています。いずれにせよ、神さまの存在を否定した哲学者として名を残すことになりました。

神さまは本当に死んでいなくなってしまったのでしょうか。この問いに多くの日本人は答えられないことが先のデータからも分かります。神さまの存在に確信が持てない人が約84%いるのですから。

2. 神さまは生きておられる

こうした日本人の宗教観に対して、聖書は明確に神さまはいると宣言しています。先のデータでも、「神が存在することに疑いを持っていない」人は世界で見ると41.6%います。それに対して日本は4.4%ですから、あまりの差に驚きます。

さて、聖書が述べる神さまの存在を旧約時代のエリヤという預言者から確かめたいと思います。エリヤは紀元前9世紀前半に北王国イスラエルで活躍した預言者で「主こそ神である」という意味の名前です。神さまがおられることが前提のような名前ですね。当時の北王国イスラエルの王はアハブといい、この人はイスラエルの神さまを捨ててバアルという偶像をまつり、イスラエルを宗教的墮落へと導いた人です。エリヤは間違った方向に国を導こうとするアハブ王の前に立ちはだかり国の墮落を食い止めようと戦った人物です。

今日テキストとしているⅠ列王記17章は、3つの話から構成されています。一つはエリヤがアハブ王の前で飢饉の到来を預言し、エリヤはヨルダン川の東側にあるケリテ川のほとりに身を隠し、鳥が運んでくるパンと肉で養われるという出来事。二つ目はエリヤの預言は的中し、厳しい飢饉がやって来たのでエリヤ自身もシドンのツアレファテの一人のやもめの下に身を寄せ、やもめと同居していのちを繋いだという出来事。三つ目はある時やもめの一人息子が死んでしまい、その息子を生き返らせたという出来事です。このうちの二番目と三番目の出来事に目を向けてみましょう。

飢饉の中でやもめと同居した出来事、またやもめの一人息子を死からよみがえらせた出来事の中に「神さまは確かに存在し、生きている」ことが証されているのです。

3. 飢饉の中に生きておられる神さま

エリヤがやもめの家に身を寄せたとき、やもめの家庭事情は危機的な状況でした。と同時にエリヤ自身も危機的な状況にありました。というのは飢饉で以前身を隠していたケリテ川の水が枯れてしまったからです。ツアレファテで一人のやもめに会うとエリヤは「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」(10節)と飲み水を求めました。ついでに「一口の

パンも持って来てください。」(11節)と食べ物も求めました。しかし、この時のやもめの家庭事情は深刻でした。「あなたの神、主は生きておられます。私には焼いたパンはありません。ただ、かめの中に一握りの粉と、壺の中にほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本の薪を集め、帰って行って、私と息子のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです。」(13節)と、やもめと息子は最後のわずかな食事を取って、死のうとしていたからです。こんな大変な親子を前にエリヤは非情とも取れることばを発します。「まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。その後で、あなたとあなたの子どものために作りなさい。イスラエルの神、主が、こう言われるからです。『主が地の上に雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくなるしない。』」(13, 14節)。

実はこのやもめは「あなたの神、主は生きておられます。」(12節)とエリヤの背後に神さまの存在を見ていたのです。ですからエリヤのことばを受け入れることができました。そして事実、かめの粉は尽きず、壺の油はなくならなかったのです。これは、飢饉を通して真のいのちの供給者は誰なのかを示していて、それが生きておられる神さまなのです。ここでは食物の満たしをもっていのちが支えられています。私たちは衣食住があれば満たされるのかと言えばそうではありません。心が渇き、魂が荒んでいればそれは満たされていない証拠です。その渇きを止めてくださるのが神さまなのです。神さまはどんなときも私たちを守り、満たしてくださるお方だからです。飢饉の中での満たしはそれを私たちに示すものでした。

4. 死者をよみがえらせる神さま

もう一つは、死んだやもめの息子を生き返らせたことです。死は人間からいのちを奪うものです。その死に対して、いのちを与える存在がいるとすれば、その存在は生きていなければなりません。死んだ者がいのちを与えることはできないわけですから、死者をよみがえらせることで神さまは生きていることを証明されたのです。

エリヤは「私の神、主よ。…」と2回呼びかけ、死者をよみがえらせたのは自分ではなく神さまであることを明確にしています。「主はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちがその子のうちに戻り、その子は生き返った。」

(22 節)とあり、神さまが死という絶望からいのちという希望に移された瞬間です。人はどんなに頑張っても死を克服することはできません。しかし、永遠に存在している神さまは死を克服できます。その証拠が十字架で殺されたイエス・キリストをよみがえらせたことの中に証されているのです。それゆえに、今私たちはよみがえられたキリストを見上げるときに、神さまは生きておられることを知るのであります。このやもめもこう証言しました。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。」(24 節)。人が死という絶望からいのちという希望に目を向けるとき、そこに見えるのはいのちの源である神さまではないでしょうか。その神さまを見上げるとき、人は生きるのです。

まとめ

もし、神さまがいなくなれば、人は本当に苦しいときどこから助けを得たら良いのでしょうか。「夜と霧」の著者である فرانクル は、ナチスの強制収容所での出来事を通して、どんなときにも生きる希望を持って歩むことの大切さを述べています。生きるということ自体が、まさしく神さまが生きておられることの証拠なのです。

フランクルについて記されたあるコラムの一文を紹介して締め括ります。

「フランクルがいたユダヤ人の収容所は、過重労働と飢餓の連続する悲惨な毎日であった。あるとき、飢えかけた人がじゃがいも倉庫に忍び込み、数キロのジャガイモを盗んだ。その収容所のきまりでは絞首刑である。当局は被収容者たちに対し、侵入者の引き渡しを要求し、拒めば全員一日の絶食を課すと伝えた。2500 名の仲間は、誰が盗んだかは知っていたが、その人を絞首台にゆだねるより断食を選んだ。食事が出なかったその日の夕方、収容所

全体がすさんだ雰囲気になっていた。その時居住棟の班長が「ここ数日間、病死したり、自殺したりした仲間を見ていると、死因はさまざまでも本当の原因は自己放棄である。どうしたら精神的な崩壊を防げるか、解説してほしい」とフランクフルに頼んだ。フランクフルは立ち上がり、次のような話をした。我々の置かれている状況は、お先真っ暗で生き延びる蓋然性は極めて低い。しかし私個人としては、希望を捨て投げやりになる気は全くない。なぜなら、未来のことは誰にもわからないし、次の瞬間に自分に何が起こるかもわからないからだ。たとえ、明日にも劇的な戦況の展開が起こることは期待できないとしても、収容所の経験から、少なくとも個人レベルでは、大きなチャンスは前触れなくやってくることを私たちはよく知っている。ありがたいことに未来は未定だ。人間が生きることには常にどんな状況でも意味がある。今このとき、私たちは、誰かのまなざしに見下ろされている。誰かとは友かも、妻かも、神かもしれない。その見下ろしている誰かを失望させないでほしい。私たちは一人残らず、意味もなく苦しみ死ぬことを欲しないと。」

もし、神さまが死んだままなら、私たちが生きる理由や意味はどこにあるのでしょうか。人は辛くても誰かのために生きようとするのではないのでしょうか。それさえ意味がないような虚しい人生を送りたいとは思いません。どんなに辛く苦しい中でも生きる希望を持つことができるなら、誰かのために生きようとするなら、それは神さまが生きておられることの証なのです。私たちに、神さまにあって生きる理由と意味があるのです。それを多くの人と共有できたら幸いです。